

市長賞

塚元 悠唯（つかもと ゆい） 陶鎔小 3 年生

作品名：百万本のひがん花

図 書：ひがん花の赤いじゅうたん

わたしは、『ひがん花の赤いじゅうたん』というお話を読みました。この本を読んだきっかけは、しょうかい文の「それは、一人のおじいさんのある思いから始まったのです」という文を読んで、「ある思い」とは何か気になったからです。

なぜ、小栗大造さんというおじいさんがひがん花をうえ始めたのでしょうか。大造さんは、二十才のときから九年間戦争に行っていました。おじいさんになった大造さんは、戦争のこわさを知ってもらおうと書いていましたが、まだどのような行動で表せばよいかわかりませんでした。ある年の秋、矢勝川の土手を散歩していた大造さんは、子供の頃にはたくさんのひがん花がさいていたことを思い出しました。それは、大造さんにとって平和なふるさとそのものだったのです。大造さんはこの事をきっかけに、矢勝川の土手にひがん花をうえる事を決心しました。いろいろな人の協力で、球根は五十万球も集まりました。そして、三年後の九月、地元の子供たちとうえたひがん花が八万本さきました。大造さんの作業を手伝ってくれる人はだんだんふえ、「矢勝川の環境を守る会」という会もできました。会のメンバーでがんばって仕事をしたおかげで、ひがん花は八十万本、九十万本と数を増やし、ついに百万本のひがん花がさいたのです。

このお話の中で、一番心にのこったのは、大造さんがついに百万本のひがん花をさかせた場面です。むずかしい事でも、みんなで力を合わせればできるんだな、と思いました。

わたしは、百万本もひがん花がさいている所を見たことがありません。どれだけきれいなのかな、見てみたいな、と思いました。

このお話を読んで、戦争で亡くなくてもかなしいけれど、戦争で生きのこった人もつらい思いをしていることをはじめて知りました。

今年の夏休みに、わたしは郷土資料館に行き、八王子空しゅうを体験した人にお話をうかがったり、八王子空しゅうの紙芝居を見たりしました。

戦争は残酷なだけで、何もいいことはありません。これからも、戦争のない平和な日々が続いてほしいです。